カール・バルト――彼自身の著作に即した彼自身の神学をトータルに把握するためのキーワード（その１２の１）

（その１２の１）カール・バルト自身の＜ただイエス・キリストの名だけ＞ということ

（文責・豊田忠義）

（その１２の１）カール・バルト自身の＜ただイエス・キリストの名だけ＞ということ

バルトは、歴史＜主義＞者では全くない。しかし、至極当然なことであるが、バルトは、歴史的な＜事実＞を正直に受け入れる者である、ちょうど客観的な正当性と妥当性とをもっているフォイエルバッハやマルクスやハイデッガーの根本的包括的な原理的な自然神学あるいは自然的な信仰・神学・教会の宣教としてのキリスト教（神学）批判を正直に受け入れるように。したがって、バルトは、『教会教義学　神の言葉』で、第一に、次のように述べている――「歴史＜主義＞は、人間精神が生み出したものを問題とする限り、啓示を問おうとしないで人間精神の自己理解を第一義として聖書の中でも神話を問う〔人間的理性や人間的欲求やによって主観的に恣意的独断的に対象化され客体化された「存在者」、その人間の意味的世界・物語世界、「存在者レベルでの神」としての神話を問う〕」ことをする。しかし、三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の実在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身（「啓示ないし和解の実在」そのもの）を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、キリスト教に固有な類と歴史性）の関係と構造（秩序性）における第二の形態の神の言葉である「啓示の証言としての聖書の理解〔その最初の直接的な第一の、「啓示ないし和解」の「概念の実在」、すなわち預言者および使徒たちの「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」の理解〕」と、「神話の証言としての聖書の理解」は、「相互排除の関係にある」。したがって、「聖書記事を歴史物語とみなし、聖書記事の一般的な歴史性（Geschitlichkeit）を問題化することは、証言としての聖書の実体を攻撃しない」が、しかし、「聖書記事を神話として受けとることは、証言としての聖書の実体を攻撃する」。何故ならば、「聖書の主題であり、同時に哲学の要旨である」神と人間との無限の質的差異を固守するという＜方式＞の下において、イエス・キリストにおける神の自己「啓示〔神の時間、啓示の時間〕は、歴史〔人間の類の時間性、人類史、世界史〕の枠に、はめ込まれてしまうような歴史的出来事ではない」からである。したがって、**聖書の歴史認識の方法**は、「一般的な歴史性を含んではいるが**史実史ではない＜歴史物語・古譚として受けとる＞**点にある」。また、バルトは、同じ『教会教義学　神の言葉』で、第二に、次のよ

うに述べている――「（中略）確かに受肉〔その内在的本質である神性の受肉ではなく、その第二の存在の仕方における言葉の受肉〕は中心的にして重要なものではあるが……新約聖書の本来的内容であるというふうには言ってはならないのである。（中略）それはおよそすべての他の宗教世界の神話や思弁の中にも見出されるものである。（中略）人は、聖書が語っている受肉を、ただ聖書からのみ、換言すれば**イエス・キリストの名からのみ……理解することができる**。……神人性それ自体もまた新約聖書の内容ではない〔何故ならば、農耕を経済的基盤とした人類史のアジア的段階の日本において、＜非＞農耕民は、政治的宗教的＜支配＞としての天皇を含めて神人と呼ばれていたからである〕。**新約聖書の内容とは、ただイエス・キリストの名だけであり**、そのイエス・キリストの名がたしかにまた、そしてとりわけ、彼の神人性の真理をその名に含んでいるのである。**ただまったくこの名だけ**〔**「ただイエス・キリストの名だけ」**〕**が、啓示の客観的現実を言いあらわしている**」。したがって、バルトは、同じ『教会教義学　神の言葉』で、次のように述べている――第三の形態の神の言葉である全く人間的な「**教会の宣教をより危険なものにしてしまう」のは**、その**教会の宣教が、「正しい注釈を、先ず第一義的に優位に立つ原理としての**〔「啓示ないし和解の実在」そのものであり、起源的な第一の形態の神の言葉そのものである〕**イエス・キリストに**」、それ故に**具体的にはその媒介的・反復的な関係性における**それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における第二の形態の神の言葉である**聖書**（その最初の直接的な第一の、「啓示ないし和解」の「概念の実在」、すなわち預言者および使徒たちの「イエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」）**に基づくことをしないところにある**」、**換言すれば「正しい注釈」を、「最終的に……教会の教職の判決に」、「間違うことはありえないものとして振る舞う歴史的――批判的学問の判決に、依存させてしまう」ところにある**、と。この「間違うことはありえないものとして振る舞う歴史的――批判的学問の判決に、依存させてしまう」ということは、人間学的領域においてもあり得ないことである。言葉と思想の専門家の吉本隆明は、次のように述べている――「神話にはいろいろな解釈の仕方があります。比較神話学のように、他の周辺地域の神話との共通点や相違点をくらべていく考え方もありますし、神話なるものはすべて古代における祭式祭儀というものの物語化であるという考え方もあります。また神話のこの部分は歴史的＜事実＞であり、この部分はでっち上げであるというより分け方というやり方もあります。**そのどの方法をとっている場合でも、この説がいいということは、いまのところ残念ながら断定できません**。プロ野球で三割の打率があれば相当の打者だということになるのと同じように、**神話乃至古代史の研究において、打率三割ならばまったく優秀な研究者であるとわたしはおもっています。じぶんでそれ以上の打率があるとおもっているやつはバカだとかんがえたほうがいいとおも**

います（『敗北の構造』「南島論」）。

さて、テレビのBSやCSで中国時代ドラマを観ていると孟子の「天の時、地の利、人の和」という言葉が時々出てくる（例えば、経済的基盤を農耕に置いた人類史のアジア的段階における秦の時代を扱った「昭王」、清の乾隆帝の時代を扱った「エイラク」)。それは、「人の和」の重要性を説いている。そして、孟子は、「民本主義」と「易姓革命」論を説いている。しかし、この人類史のアジア的段階における「民本主義」と「易姓革命」論は、資本主義を経済的基盤とする人類史の西欧的段階における市民革命を経由した民主主義や革命思想とは違って、人類史のアジア的段階の前のプレ・アジア的段階（換言すれば、アフリカ的段階、北米インディアン的段階、縄文的段階）における絶対的専制を否定的に媒介したところで成立したそれである。何故ならば、アフリカ的段階（換言すれば、アフリカ的段階、北米インディアン的段階、縄文的段階）において王は、政治制度としても、土地所有者としても、絶対的専制君主ではあったが、「疾病のような凶事が襲ったり、失政をまねいたり、天変地異などが永く続いたりすると、王の無能や不手際とみなされ、罷免されたり、殺害されたり、障害の生けにえにされた」からであり、「この意味で王は裏返された絶対奴隷だともいえた」からである（吉本隆明『アフリカ的段階について　史観の拡張』)。また、「王殺しの伝承」も残っている（山口昌男『文化人類学への招待』岩波書店)。このことは、孟子の「民を貴しと為し、社稷これに次ぎ、君を軽しと為す」や、「武王による殷から周への王朝革命（殷周革命）における民衆にデタラメをして忠義な家来をないがしろにするようなのは本当の王ではない」から、「そんな者〔王〕は殺してしまってもかまない」とされる王の在り方に対応している（金谷治『中国思想を考える　未来を開く伝統』中央公論新社)。このような訳で、金谷は、人類史のアジア的段階においても、西欧近代の段階における民主主義が存在したというように述べているが、その理解は、人類史の段階論から言って、誤解であり誤謬であり曲解なのである。また、経済的基盤を農耕に置いた人類史のアジア的段階における支配の側からの言葉としてそその第1条で「和を以て貴しと為す」と記した聖徳太子の『十七条憲法』の16条には、農民を使用する時には、〔生産物の貢納、貢納制を維持するために、支配の維持のために〕農閑期の冬にすべきであって春から秋にかけてすべきではない、というように規定されている（相賀徹夫『日本大百科事典　11』小学館)。この春から秋にかけて農民を使用すべきでないという規定は、確かに農民のためのものでもあるが、その主旨は、支配の経済社会構成の基盤が農耕であったために、農耕の周期と季節の周期が一致する春から秋にかけては農民には農耕に専念させるべきであるという点にある。したがって、農閑期の冬にすべきであるという規定からして、第16条は、農民を第一義的に大切にせよという規定でないことは明らかである。農耕の主体は農民であり、その生産物の処分と享受とは本来的には農民の側にあるのであるから、この規定の主旨は、あくまでも農耕を経済社会構成の中枢におく、すなわち農耕を物質的基礎とする支配の

維持と強化にあることが分かる。何が言いたいのかと言えば、われわれは、義務教育において、『十七条憲法』に「和を以て貴しと為す」と記した聖徳太子は偉い人であると教えられたのであるが、そのような支配の側からの「書かれた歴史」における記述は、「**そのまま鵜呑みにしたり模倣したりすることをしない方がよい**」ということである。現在、神学的領域での権威性？を持っているキルシュバーム後のバルトの秘書であったエーバハルト・ブッシュの『カール・バルトの生涯』の記述には、自然神学か＜非＞自然神学かという分岐に関わる根本的包括的な原理的な事柄について、バルト自身によるものではない、それ故に客観的な正当性と妥当性とを持っていない質の悪い資料を使用して、誤解や誤謬や曲解を生じさせるような記述を行っている箇所が所々に散見され、それ故に人々にバルトを誤解させ誤謬させ曲解させ、バルト自身にも迷惑をかけてしまうことになるから、敢えてこのことを書いてみたのである。**自然神学か＜非＞自然神学かという分岐に関わる根本的包括的な原理的な事柄については、バルト自身の講演や著作の記述に即して、自ら検証した方がよいのである。**

さて、**1956 年、バルトが 70 歳となる年は、彼にとって重要な年となった。**何故ならば、200 年前の 1756 年にモーツァルトがザルツブルクで生誕した年であったからであり、その年の「クララ・ハスキルがヘ長調のピアノ協奏曲を演奏した〔バーゼルの〕音楽ホールにおけるコンサートで、私はモーツァルト自身が突然舞台のそでに立っているのを幻のように見たのです。それはあまりにも現実味を帯びていたので、私は涙を流しそうになったほどです。（中略）いずれにしても今私は、モーツァルトが、その晩年にどのような姿をしていたかをはっきりと見たのです」という体験をしたからである。そして、バルトは、「私が、もしいつか天国に行くことになれば、そこでは誰よりも先ずモーツァルトを、それから次に〔自然神学と＜非＞自然神学が混在していた〕アウグスティヌスと〔自然神学を展開していた〕トマスを、そして〔自然神学と＜非＞自然神学が混在していた〕ルターとカルヴァンと〔近代＜主義＞者として自然神学を展開していた〕シュライエルマッハーを訪ねてみたいと思っています」と述べた。このバルトは、「私は、**特に芸術的才能に恵まれた人間でも、芸術的素養のある人間でもなく、その上、救済史と芸術史のある部分を混同したり、同一視したりしようとは全く思わない。**しかし、モーツァルトの音楽の黄金の音色と調べは、……**福音としてではないが、神の自由な恵みの福音によって啓示された神の国の＜比喩＞として**……若い頃から私に語りかけてきたものであり、繰り返し素晴らしい新鮮さをもって語りかけて来た」と述べている。また、「スイスのモーツァルト協会の委員」であったバルトは、モーツァルト記念祭における講演『モーツァルトの自由』において、「彼は〔作曲家として、その自己表出と指示表出の構造としてある創造とその外化された表現における享受との総体性としてある〕音楽を演奏しつづけ、演奏し終わるということがなかった」、「人間の限界と死について、はっきりと知った時でも、演奏することを止めなかった」と述べている。何故ならば、モーツァルトは、天才と言われなが

らも、また実際的に事実的に天才でありながらも、自分みたいに「**作曲に長い時間と膨大な思考を注いできた**」**人間は一人もいない**し、「**有名な巨匠の作品はすべて念入りに研究した**」し、「**作曲家であるということは精力的な思考と何時間にも及ぶ努力を意味する**」というように書簡で述べているからである。われわれは、このようなモーツアルトの在り方と、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、「聖書釈義と絶えず接触を保ちつつ、また教会の古今の注解者・説教家・教師の発言を批判的に比較しつつ、その時時の現在における教会の表現・概念・命題・思惟行程の包括的研究において『教義そのもの』を尋ね求めた」バルトの在り方とを重ね合わせることができる（『教会教義学　神の言葉』および『啓示・教会・神学』）。われわれは、**そこには、「魔神はひとりも住んでいない**」ということを、すなわち**一つ一つレンガを積み上げるようして作品を創造していく努力があるだけである**ということを知るのである。

このバルトにとって、「**神学全体のキリスト論的集中化の問題**」**は、「キリスト論的方向づけ**」**にあるのではなく**、自己自身である神としての自己還帰する対自的であって対他的な（完全に自由な）聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「失われない単一性」・神性・永遠性を本質とする「父なる名の内三位一体的特殊性」・「三位相互内在性」における「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」の、われわれのための神としての「外に向かって」の外在的なその「失われない差異性」における第二の存在の仕方（性質・働き・業・行為・行動、子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事）――すなわち、「啓示ないし和解の実在」そのものであり、起源的な第一形態の神の言葉そのものであり、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神にしてまことの人間イエス・キリスト、「**イエス・キリストの名が問題**」**である、「主イエス・キリスト御自身が問題なのです**。あらゆるキリスト論との取り組みは……結局のところ、イエスの山上の変貌の起こった高い山での弟子たちの場合と同じように、彼らが目をあげると、**イエスのほかには誰も見えなかった**〔マタイ福音書17・8〕」、「**イエス・キリストご自身が問題**」**である**。PDF 版「カール・バルト――彼自身の著作に即した彼自身の神学をトータルに把握するためのキーワード」における（その１）から（その１１）までの**論稿は、すべて「イエス・キリストの名」に向かって、「主イエス・キリスト御自身」に向かって、「ただイエス・キリストの名だけ」に向かってベクトルが集中している。**

バルトは、『教会教義学　神論』において、次のように述べている――**常に先行する「神の用意」に包摂された後続する「人間の用意」ができている**ところの、「人間に対する神の愛と神に対する人間の愛の同一」（『ローマ書』）であり、「永遠の（神との人

間の）和解」（神の側の真実の真実としてある神の人間との架橋）であり、神との間の「平和」（ローマ五・一）であり、**それ故に神の認識可能性である**自己自身である神としての自己還帰する対自的であって対他的な（完全に自由な）聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「失われない単一性」・神性・永遠性を本質とする「三位相互内在性」における「三位一体の神」の、われわれのための神としての「外に向かって」の外在的なその「失われない差異性」における第二の存在の仕方、「啓示ないし和解の実在」そのものであり、起源的な第一の形態の神の言葉そのものであり、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」**＜まことの神にしてまことの人間イエス・キリスト＞において、「神の用意の中に含まれて、人間にとって、神に向かっての、したがって神認識**〔信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主観に実現された神の恵みの出来事〕**に向かっての人間の用意が存在する**」、と。すなわち、われわれは、**常に先行する神の用意に包摂された後続する人間の用意という「人間の局面」は、「＜全くただキリスト論的局面だけ＞である」**と言わなければならない。したがって、われわれは、**ただこのことに「感謝し、また感謝し続ける」**と言わなければならない。

ここからは、＜ただイエス・キリストの名だけ＞に集中させ続けたカール・バルトの晩年における時間性における 70 歳以降の途上の歩みについて、時系列的に書いてみたい。

70 歳台に入ったバルトにとって、「登山」は、「まったく喜びを与えなくなった」、「机に向かっての仕事のスピード」は、「目立って遅くなった」。「今や彼は、……自分の年齢を意識するようになった」。しかし、「『教会教義学』を書きつづけ、完成するようにとの要求は、うなだれて手を休めてしまうことを〔彼に〕許されなかった」。

バルトは、1954年（68歳）以来1964年（78歳）まで続いたバーゼル刑務所での「多くの場合聖餐式とともに行われた」「祈りにおける説教」で、次のように語った――「人間はみんな、被告訴人なのです。しかしその裁判官の席にすわっているのは、和解者であるキリストです」、「クリスマスを祝うのには大聖堂がふさわしいのか、それともより高級な人たちによって祝われるエンゲルガッセ礼拝堂がふさわしいのか、私には分かりません。しかし私としては、……刑務所でこそ、ふさわしく祝うことができると確信しています」、と。また、そこでの最後の説教1964年5月29日復活祭「主を見た時　ヨハネ二〇・一九－二〇」では、次のように語った――「ただ単に考えや夢の中にではなく、何か精神的にではなく、身体的に見、聞き、つかまえることできる形における弟子への顕現の出来事」（イエス・キリストの復活の出来事）について説教をしている。「復活の出来事がどのようにして……起こりえたか、また起こったか、……私はあなたがたと同じように、その理由を知らない。それは〔人間の感覚と知識を内容とする経験的普遍からすれば〕人が信じないようなことだと言う以外に、単純な言い方はほかに存在しない。事実、当時でさえも、解き明かすことは愚か、書

き記すことや説明することはできなかった」。「イエスの復活は、徹頭徹尾神の業であって、そのようなものとして、最高度に良くなされたが、しかし〔それが徹頭徹尾神の業であるが故に〕最高度に理解し難いものである」。したがって、「当時でさえも、ただ認識〔信仰〕され、告白され、証しされ、宣べ伝えることができただけである」。「今日でも、ロシアにおいて、キリスト者は、お互いに、『イエス・キリストは甦られた！』と挨拶し、それに対して相手は、『まことに彼は甦られた！』と答える」。「このことは、説明ではなく」、まさにイエス・キリストにおける神の自己啓示からして、そのイエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の総体的構造における神のその都度の自由な恵みの決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいて終末論的限界の下で与えられる信仰の認識としての神認識(啓示認識・啓示信仰、人間的主観に実現された神の恵みの出来事)に依拠した「告白・証し・宣べ伝えである」（『カール・バルト著作集17　説教集＜下＞』――ここでは、1963年5月29日復活祭となっている）。このバルトは、「福音は、魂と体、天と地、内的と外的いのちのためにある」、それ故にわれわれは、身体・肉体と精神・意識という全体的人間を考えなければならない、救贖（復活されたキリストの再臨、終末、「完成」）は、「全的人間のそれであるから、身体的復活である」と述べている（『バルトとの対話』）。

バルトは、70歳の祝賀会において、「祝意を表明した彼の学生たちに対して」、「彼らが、自分たちはバルトの弟子だと考えないように警告しようとつとめた」。バルト者ではあっても、バルト主義者や反バルト主義者や中立主義者とならないように警告した。何故ならば、バルトは、「自分の生涯の成果を、一つの新しい学派〔党派的思想、党派的共同性、党派主義〕の形成に終わってしまうことを、願わなかった」からである。言い換えれば、時代や現実に強いられながら存在し思惟し実践したバルト自身は、キリストにあっての特別啓示、啓示の真理、啓示神学、「恵ミノ類比」(啓示の類比・信仰の類比・関係の類比)、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、そのイエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の総体的構造という＜立場＞に立脚して、三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の実在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、そのような媒介的・反復的な関係性に基づいて、終末論的限界の下でのその途上性において、絶えず繰り返し、それに対する他律的服従とそのことへの決断と態度という自律的服従との全体性において、それに聞き教えられることを通して教えるという仕方で、純粋な教えとしてのキリストにあっての神・キリストの福音を尋ね求める「神への愛」と、そのような「神への愛」を根拠とした「神の讃美」としての

「隣人愛」（純粋な教えとしてのキリストの福音を内容とする福音の形式としての律法）という連関・循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指さなければならないということをよく認識し自覚していたからである。したがって、バルトは、それぞれの時代、それぞれの世紀、それぞれの世代において、その時代と現実に強いられて、「あなた方は、〔そのような仕方で、〕私が語ることを通して、あの方〔イエス・キリスト〕が語り給うことへと導かれる時にこそ、あなた方は私を正しく理解するのです」と述べた。すなわち、バルト自身にとっては、「**この世には関心をもつべき名前は、ただひとつ存在するだけ**」、まさに自己自身である神としての「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「三位相互内在性」における「三位一体の神」の、われわれのための神としての「外に向かって」の外在的なその「失われない差異性」における第二の存在の仕方（働き・業・行為、子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事）における「啓示ないし和解の実在」そのものであり、起源的な第一の形態の神の言葉そのものであり、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神にしてまことの人間「**ただイエス・キリストの名だけ**」である。この徹頭徹尾神の側の真実としてのみあるイエス・キリストにおいては、「善人たちと悪人たち、幸福な人たちと不幸な人たち、キリスト者と異教徒たち、西方の人たちと東方のひとたち」との枠組みは取り除かれ、両者は架橋され、両者は「仲間として、確実に、そして非常に間近に見ることができるようにされている」のである。このイエス・キリストにおける「『神われらと共に』という言葉」、「キリスト教使信の中心」は、キリスト教世界、キリスト教の教会共同性・教団共同性のような「狭い共同体」から「その事実をまだ知らぬ」「すべての他の人々」、「広い共同体に向かっての運動において」、その現にあるがままの不信、非キリスト者、非キリスト教、非知、個体的自己としての全人間・全世界・全人類に対して完全に開かれているのである（『カール・バルト教会教義学　和解論Ⅰ／1』「和解論の対象と問題」）。したがって、バルトは、「祝意を表明した彼の学生たちに対して」、「どうかあなた方」は、「神人協力説」のベクトルを持っている自然神学あるいは自然的な信仰・神学・教会の宣教がそうであるように、「私〔バルト〕の名」だけでなく、「他のすべての名〔アリストテレス、ヘーゲル、ハイデッガー誰々学者、誰々氏等々〕を持ち上げないでください」と述べたのである（Ⅰコリント1・10以下）。したがってまた、バルトは、「よい神学者は、理念や原理や方法というような家には住みません」と述べた。何故ならば、「よい神学者」は、「神学は方法論的には、〔人間学的領域における〕ほかの学問のもとで何も学ぶことはない」ということをよく認識し自覚しているし、「われわれが哲学的用語をつかうという事実にもかかわらず、神学は哲学的試みが終わるところから始まる」ということをよく認識し自覚しているからである（『バルトとの対話』）。

1956 年の誕生日は、バルトにとって、彼の真の処女作と言える『ローマ書』「第二

版序言」、「第二版」以来の神学的歩みを総括する機会となった。その時、バルトは、「聖書の主題であり、同時に哲学の要旨」である神と人間との無限の質的差異を固執するという＜方式＞を明確に提起した『ローマ書』の時の自分と 1956 年の時の自分は、「**ある人が少し性急に主張したように、新しいバルトになったわけではない**」と述べた。何故ならば、その＜方式＞は、最後の最後まで堅持され続けたからである。このことは、バルトの一面だけを形而上学的に抽象し固定化し全体化し絶対化して、前期バルトと後期バルトを二元論的に対立させて語る語り方を完全に否定しているのである。「私の記憶によれば、私の神学の発展途上の段階で、次の段階へ向かう最も近い二、三歩の歩み以上の見通しや、計画をもったことはありませんでした。この最も近い数歩の歩みは、……〔**時代と現実が強いてくる**〕**新しい状況に出会うごとに**、いつも私に与えられる必然性と可能性をめぐって、私が画いている像からくる印象に基づいています。（中略）私がそれを捕えたと思う以上に、向こうから私を捕える新しいものの前に立たされたのです」。このことで、バルトは、その思惟と語りの成果、その神学の成果、その神学における思想の成果を、レンガを一つ一つ積み上げるようして為して来た時間蓄積のことを述べているのである。

1956 年 9 月 25 日、アーラウで開催されたスイス牧師連合会で、バルトは『神の人間性』について講演した。「神の神性とは、『それ自身人間性の性格をもっている神性のこと』」である――すなわち、自己自身である「神の〔内在的本質である〕神性において」、自己自身である神としての「神性」を内在的本質とする「三位相互内在性」における三位一体の神の、われわれのための神としての「外に向かって」の外在的なその「失われない差異性」における第二の存在の仕方、「啓示ないし和解の実在」そのものであり、起源的な第一の形態の神の言葉そのものであり、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神にしてまことの人間イエス・キリストにおいて、「また神の神性〔神性を内在的本質とする＜まことの神＞〕と共に、ただちに神の人間性〔われわれのための神としての「外に向かって」の外在的なその「失われない差異性」における第二の存在の仕方における「真に罪なき、従順なお方」＜まことの人間＞〕もわれわれに出会う」のであり、それ故にこのように「正しく理解された神の神性こそが、その人間性を包括するものである」。したがって、バルトは、同書で、「神が神であるということがいまだに決定的となっていないような人」は、換言すれば神と人間との無限の質的差異を固執するという＜方式＞を持ち堅持していないような人は、包括的に言えば「神人協力説」のベクトルを持っている自然神学あるいは自然的な信仰・神学・教会の宣教の段階で停滞と循環を繰り返しているような人は、「今神の人間性について真実な言葉としてさらに何か言われようとも、決してそれを理解しないであろう」と言うのである。「**神の神性についての命題**」は、「**キリストの神性についての教義**」**は**、「あらゆる種類の、敬虔な、〔**自然神学あるいは自然的な信仰・神学・教会の宣教の段階で停滞と循環を繰り返す**〕自由主義的な〔近代主義的な〕、『積

極主義的な』、人間中心主義的神学の「**遊戯に対して対抗できたし・また対抗できる**」のである。すなわち、**それは、神学における思想的武器である**。

「**キリスト教的・神学的公理というものがあるとするならば、それは、真の証人としての復活のキリスト**〔「**実在の成就された時間**」、「**まことの現在**」〕**の事実**」、すなわち「**イエス・キリストは……まことに復活し給うたという事実にある**」。何故ならば、「福音書の中ではすべてのことが受難の歴史に向かって進んでおり、しかもまた同様にすべてのことは受難の歴史を超えて甦り・復活の歴史に向かって進んでいる」からである、換言すれば「旧約〔「神の裁きの啓示」・律法〕から新約〔「神の恵みの啓示」・福音〕へのキリストの十字架〔復活に包括されたキリストの十字架の死〕でもって終わる（≪「失われた非本来的な」、「否定的判決」を受けた、≫）古い世」・時間は、復活へと向かっているからである。そして、このキリストの復活（「成就された時間」、「まことの現在」）の出来事は、主イエス・キリストが支配する「新しい世〔・時間〕のはじまりである」(『教会教義学　神の言葉』)。したがって、「第一の、キリスト教的行為」は、その死と復活の出来事におけるイエス・キリストの「啓示についての……証しに生きることである」。

さて、前述したことについて、ブッシュは、「一人の証人という姿において」、「啓示と和解に『協力しつつ』参与する」ことである、と述べている。このブッシュの「神人協力説」のベクトルを持つ「啓示と和解に『**協力しつつ』参与する**」という**直接的無媒介的**な思惟と語りは、バルト自身の思惟と語りに全くなじまない思惟と語りである。厳密・厳格に、第三の形態の神の言葉である全く人間的な**教会の成員のわれわれ**は、「啓示ないし和解の実在」そのものであり、起源的な第一の形態の神の言葉そのものである**イエス・キリスト**に、そのイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である**聖書**を、自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、終末論的限界の下で絶えず繰り返し、それに聞き教えられることを通して教えるという仕方で、**媒介的・反復的に参与する**というように思惟し語らなければならない。ブッシュの『カール・バルトの生涯』を読んでいて、何カ所かで、『カール・バルトの生涯』を記述しながら、＜非＞自然神学へと向かうベクトルを徹頭徹尾貫徹させているバルトとは違って、ブッシュが、自然神学と＜非＞自然神学とを混在させて記述している箇所を見出すことができる。したがって、ブッシュは、意識的にか無意識的にか、どこかで「神人協力説」へと向かくベクトルを持っている自然神学を温存あるいは残存させているに違いないのである、そうでないならばブッシュは、どこかでバルトに自然神学の痕跡を見出そうとしているに違いないのである。

バルトは、「**礼典**」**について**、「『**第一の＜司式者＞はイエス・キリスト自身**であり』」、「そして**第二の司式者は**……**牧師ではなく『会衆全体』である**」、また「**サクラメントに関しては、『ただひとつのサクラメントが存在するだけであり、それは死人から復活された方自身〔イエス・キリスト自身〕である』**」と述べている。

1958 年、バルトは、時代と現実に強いられて、「核武装の問題に取り組むように定められた」。バルトは、「東の人間も西の人間も、この問題の中で動き始めた狂気に反対して、立ち上がるべきである。……これは、生命の危機の問題である」と述べた（この問題は、革命の問題から言えば、民族国家を死滅させる問題、民族国家の死滅の問題を明確に提起する革命にとっての究極的問題である）。また、バルトは、「世界の強国に、必要な場合には核兵器の一方的廃棄に踏み切るよう要請した」（しかし、このことは、現存する世界が経済の世界性と民族国家の一国性を単位として動いており、戦争の元凶である民族国家が自国の利害を第一義的に最優先することは確かである限り、廃棄の要請はできたとしても、廃棄されないことは明らかなように思われる）。一方で、ただ核兵器は、軍事的に最後的な戦略兵器であるから、もしもそれを実際的に使用したとすれば、その最初の瞬間からすべてが終わりとなり、それ故に戦争遂行それ自身が不可能となる――このように、バルトは認識していた。このことは、首肯できる。このバルトの「**核武装の拒否**」は、第一に、「核戦争はすべての人間の絶滅をもたらすものである」からであり、第二に、**それは、「すべての国家とすべての国民のためになる**からである」。このバルトは、「スイスの核武装にも反対した」。もっと言えば、それが＜良きもの＞であれ＜悪しきもの＞であれ経済社会構成の拡大・高度化、科学や技術の進歩と発達、その知識の細分化と増大、生活の利便性の向上等は、自然史の一部である人類史の自然史的過程における自然史的必然としての自然史的成果に属することであるから、法的政策的に遅延させることはできても停滞させたり逆行させたりすることはできないものである。したがって、一方で、その過程でのさらなる際限なき人間の欲望はなくならないから、それらが、最後的には人類の破滅をもたらすものだとしても、それ故にまた尖端的な科学と技術を利用した軍事技術や軍事力の拡大・高度化はさらに進んでいき巨大化・強力化していくことが必然だとしても、他方で、自滅志向や世界破滅志向の大国やそういう指導者・指導層でない限りは、世界大戦化したり実際的に核兵器を使用したりすることはないと言うこともできる。このような訳で、そうした問題を解決するためには、倫理や道徳や法的政策的には不可能なことであるから、究極的な課題――すなわち、世界平和、それ故に戦争の廃絶、核兵器の廃絶のためには、戦争の元凶である民族国家をいかに葬るかという、その問題を明確に提起するという点にあるのである。そのことができなければ、現存する世界が、経済の世界性と自国の利害を第一義的に最優先する民族国家の一国性を単位として動いている限り、現存する国家の枠組みやその紛争の調停機関である「拒否権」を持つ米中露英仏常任理事国５カ国主導の国連安保理による平和の試みは成功しないことは自明なことである（また、たとえ常任理事国５カ国の「拒否権」が放棄・剥奪されたとしても民族国家が現存する限りは、それが地域的なそれであれ、民族国家が介在した戦争、地域紛争はなくなることはないと言える）。

「キリストの福音」は、「『現在の冷戦において互いに対立し、相争っているイデオ

ロギーと利害と権力を越えた』雲の上」、すなわち＜彼岸・外＞にある。バルトは、「**神学的思考と社会・政治的思考との、あらゆる同一化の試みと、また両者のあらゆる並行化と類比化の試みに対して……もっとも激しいアレルギー拒絶反応を示した**」。何故ならば、「その場合には、（福音という）類比の主体がもっている類比の客体（当該の神学者の政治的洞察や見解）に対する優位が明白に、逆転不可能な形で確保され、見えつづけるということがなくなってしまう」からである、神と人間との無限の質的差異を固守するという＜方式＞が排除・廃棄されてしまうからである。すなわち、神学者自身が恣意的独断的に対象化し客体化した「神学者の政治的洞察や見解」が、換言すれば神学者自身が恣意的独断的に対象化し客体化した「存在者レベルでの神」の「福音」が、「キリストの福音と同一化されてしまう」からである。このことは、バルトにおいては、「社会的・政治的無関心を容認することではなく、むしろ決断による『態度決定』」を意味していた。このことは、詳しく言えば、それが社会的な事柄であれ政治的な事柄であれ、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、そのイエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の総体的構造における主観的な「認識的なラチオ性」を包括した客観的な「存在的なラチオ性」――すなわち、三位一体の唯一の啓示の類比としての神の言葉の実在の出来事である、それ自身が聖霊の業であり啓示の主観的可能性として客観的に存在している第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする「神の言葉の三形態」の関係と構造（秩序性）における第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とした「**かつて語った**〔純粋な教えとしてのキリストの福音の〕＜**説教**〔**言葉**〕＞**の一貫した繰り返しが、（ある**〔時代と現実が強いてくる〕**状況下において、その状況に抗するそれとして）おのずから＜実践に、決断に、行動＞になって行った**」という点にある。

1958 年の夏、バルトは、「彼の視点」から、「哲学者と神学者、両者は共に『唯一の……真理の全体』に直面しており、しかもその真理〔キリストにあっての特別啓示、啓示の真理〕は、両者を凌駕しているので、両者は共に『天上の高みから下に向かって』語ることはできないという前提に基づいて」、バルトは、「**神学者は『その素朴さを恥じることなく**、彼の思考と言説の道が、それを通ることによって哲学者の道はそこでは完全に断ち切られるほど厳格な形で、**神学者に提示される唯一の真理の全体とは、イエス・キリストのことである……と、直接、無条件に答える**』」と述べた。このことは、明らかに、『ローマ書』「第２版序言」にある「聖書の主題であり、同時に哲学の要旨である」神と人間との無限の質的差異を固守するという＜方式＞の言い換えである、その＜方式＞の徹底した貫徹の表明であるである。それにも拘らず、ブッシュは、「このテーマは、それまでバルトが直接とり上げたことがない」それであると述べているのであるが、それは全くの誤解・誤謬・曲解であって、バルトの処女作『ローマ書』「第２版序言」から一貫性をもって堅持されているそれなのである。ブッシュ

自身、『カール・バルトの生涯』で、神と人間との無限の質的差異を固守するという＜方式＞を共有したバルトとヤスパースとの関係を記述していながら、換言すれば「哲学者が哲学者として、また神学者が神学者として、考え、語り、書くということにおいて協力関係は成立する」と記述しながら、「このテーマは、それまでバルトが直接とり上げたことがない」それであると述べているのである。バルトは自身は、『教会教義学　神の言葉』において、次のように述べている――「哲学、歴史学、心理学等は、この神学的問題領域のどれにおいても、事実上、教会の自己疎外の増大以外のなにものにも役立ちはしなかった」、「神についての教会の語りの堕落と荒廃以外の何ものにも役立ちはしなかった」、その時には、「哲学は哲学であることをやめ、歴史学は歴史学であることをやめる」、「キリスト教哲学は、それが哲学であったなら、それはキリスト教的ではなかった。また、それがキリスト教的であったなら、それは哲学ではなかった」、と。

バルトは、パウル・ティリッヒが「訪れた時、彼は人間的には魅力のある人物だと思ったが、神学の内容〔一般的啓示、一般的真理、自然神学、「存在の類比」の＜立場＞に立脚した「神学的認識方法」〕は……〔キリストにあっての啓示、啓示の真理、啓示神学、「恵ミノ類比」・啓示の類比・信仰の類比・関係の類比、「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の総体的構造という＜立場＞に立脚した＜非＞自然神学的認識方法の私とは〕まったく異なったものです」と述べている。吉永正義は、『バルト神学とその特質』において、「ブルンナーの神学、ブルトマンの神学、ティリッヒの神学、ポスト・ブルトマニヤンの神学」を総括する意味で、「バルトは『ブルトマンも説教するが、ブルトマンの説教は説教にならないで講演〔自己表現としての説教〕になってしまう』というが、これは……核心をついたブルトマンに対する批判というべきではないだろうか」と述べている。言い換えれば、ティリッヒのそれは、まさに「神人協力説」へと向かうベクトルを持っている自然神学あるいは自然的な信仰・神学・教会の宣教の段階におけるそれであるということである、それ故に＜非＞自然神学あるいは＜非＞自然的な信仰・神学・教会の宣教へと向かうベクトルを持つバルトとは「まったく異なったもの」だということである。

1959 年から 60 年にかけての冬学期と、1960 年の夏学期に、バルトは、「カルヴァンの演習」を行った。バルトは、『キリスト教綱要』の「新しい版の序文」に、「カルヴァンは――ルターと違って――天才ではなかった。むしろ良心的な聖書釈義家であり、厳密で堅実な思想家であり、同時にキリスト教的、教会生活の実践に倦むことなく……努力する神学者であった」、「彼は……自分の研究結果を受け入れるように強制することなく、むしろ自分の研究を取り上げて、自分の足跡をたどりながら、新しい結果に向かって進んでいくことを求める。『カルヴァン主義者』というものがあるとするならば、それは、カルヴァンの『綱要』によって、自分自身の目と耳を用いて、カルヴァンにとって問題であった真理に従って行くことを学んだキリスト者、また神学

者以外でありえない」と書いた。このバルトは、「ドイツ人はまさにこのような意味でルターを教師とすべきであると、……しばしば要望した。彼自身も、ともかくそれとは違った意味で、カルヴァンの弟子であろうとは思わなかった。またさらに、彼自身も、それとは違ったいかなる意味においても、自分の学生たちにとっての教師となろうとは思わなかった」。**バルトにおいては**、徹頭徹尾、「**ただイエス・キリストの名だけ**」**が問題であった**。

1960年、バルトは「彼自身が臨時の拘置所付牧師、教誨師として、繰り返して直接直面した刑務所と拘置所の機構の問題について、基本的な解明を行った」。「犯罪者になる神の予定というものが存在するかという質問」に対して、バルトは、次のように答えている――「犯罪者への病的素質といったものは存在するが、**悪への神の予定などというものは存在しない**」。「**存在するのは、道を見失ったすべての人間を『救済するという神の予定（すなわち神の恵み）』だけである**」、また「『健康な人たち』も、良くない（「危険が少ないとは言えない」）素質を負っています」、と。この思惟と語りは、人間論的な自然的人間、教会論的なキリスト教的人間、神学者、牧師、聖職者、キリスト教的著述家、大学社会の学者、評論家、校長を含めた教師、警察、検察官、弁護士、裁判官、医者、看護師、道徳家、慈善家、誰であろうと、現実的な利害対立とか愛憎問題とか戦争とか等の不可避な「機縁」（契機）さえあれば、悪をなし得るし、傷害も犯し得るし、自分が意志しなくとも、人一人だけでなく多数の人を殺し得るという究極的観点（還相的観点）において、自己欺瞞に満ちた市民的観点・市民的常識（過渡的な往相的観点）から超出した親鸞とよく似ていると言うことができる。

ブッシュは、バルトが和解論における特殊倫理学を論じるはずであった『教会教義学Ⅳ／4 断片　キリスト教的生の基礎づけ』（邦訳「キリスト教的生＜断片＞」）について、次のように述べている。第一に、本来バルトが「目論んだ配列を、しばらくの間放棄して」、彼は、「主の祈りを手引きとして、キリスト教生活のさまざまな実践上の諸側面を論じたい」と考えた、第二に、しかし「これらすべてに先立って」、「キリスト教的生活の基礎づけの論述として」「洗礼論が展開されることになっていた」、「洗礼論も、神御自身の業としての聖霊による洗礼と礼拝における人間の業としての水による洗礼との全体性において論じられることになっていた」、第四に、「聖餐論が、締めくくりとして、また仕上げとして」、「キリスト教的生活の革新と保持との論述として取り扱われることになっていた」。この場合、バルトは、「聖餐を、神御自身によって、神のみによってもたらされた、……『革新と保持』に直面する教会の服従の行為として、……理解しようとした」。すなわち、「聖餐を、その自己犠牲におけるイエス・キリストの現臨に応答し、彼の将来〔復活されたキリストの再臨、終末、「完成」〕を待ち望む感謝の表明として理解しようとした」、第五に、「**洗礼論においても、1943 年の洗礼論の場合と同じように、再び乳幼児洗礼は決定的に拒否された**」、第六に、バルトは、「イエス・キリストの復活と聖霊の注入だけを、聖礼典と呼びたいと考

えた」。「このような聖礼典がキリスト教的生活を基礎づけるという限りにおいて、彼は『聖霊による洗礼』について論じたいと思った」。バルトによれば、「聖霊による洗礼」は、神と人間との無限の質的差異を固守するという＜方式＞を堅持して、「純粋に人間の行為としての水による洗礼と厳密に区別されなければならない」と考えた。この「純粋に人間の行為としての水による洗礼」は、「イエス自身が受けた洗礼にその根拠を持っている」。また、この「水による洗礼」は、「聖霊による洗礼の側から授与される」、第七に、「主の祈りのアバ、父よという呼びかけ」は、「キリスト教的エートスの根本的行為である」。『教会教義学　神の言葉』によれば、イエス・キリストが「聖霊の特別な働きとして約束したもの」は、「慰め主としての霊」と「真理の御霊」であるが、聖霊は、「聖書の中のキリスト教原理を、覆いをとって明らかにする」、「キリストについて語ることができる能力（ヨハネ一四・二六）」であり、「上からのよき賜物」であり、「聖霊はみ子の霊」であり、それ故に「子たる身分を授ける霊」であり、客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」の中での主観的側面としての「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」（神の第三の存在の仕方である、聖霊なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事）としての「聖霊を受けることによって」、「イエス・キリストが神の子であるという概念を根拠として、われわれは神の子供、世つぎ、神の家族であり、「『アバ、父よ』と呼ぶ（ローマ八・一五、ガラテヤ四・五）ことができる」のであり、また「和解者が神の子であるがゆえに、……和解、啓示の受領者たち」は、受領者と授与者との無限の質的差異を固守するという＜方式＞の下において、「神の子供である」、第八に、バルトは、「御名をあがめさせ給え」について、すなわち「神の栄光のための熱心」について、神の隠蔽性と顕現性の下において展開した。

ブッシュは、**一方で**、バルトが「神の国は人間によって実現されることも、準備されることもあり得ず、この世界に対してだけでなく、キリスト教世界に対しても『全く独自ナ要因』であるということを、……強調した」と述べている**にも拘らず、他方で**、バルトが「『自然神学』に対する徹底した批判の後に……神は『世界』にとっても……主観的にではないが、しかし客観的には知られていると語ったことは、……注目すべきことである」と述べて、いかにもバルトがここではキリストの啓示とは独立した何か客観的なそのようなものが存在するという「**自然神学」を容認したように受け取ることができるような曖昧な語り方をしている**。キリストにあっての特別啓示、啓示の真理、啓示神学、「恵ミノ類比」（啓示の類比・信仰の類比・関係の類比）、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、そのイエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の総体的構造という＜立場＞に立脚した＜非＞自然神学へと向かうベクトルを持ち堅持している神学における思想家・バルトは、＜非＞自然神学と自然神学とを温存させたあるいは残存させた両者が混在しているブッシュとは全く違うのである。もしもブッシュが記述しているよう

に、「客観的には知られている」とバルトが述べているとするならば、それは、**三位一体の唯一の啓示の類比**としての神の言葉の実在の出来事である、それ自身が神的愛に基づく父と子の交わりである**聖霊の業**（「**啓示されてあること**」）であり啓示の主観的可能性として**客観的に存在している**第一の形態の神の言葉である子としての**イエス・キリスト自身**（「**啓示**・語り手の言葉ないし和解の実在」そのもの、「子の中で創造主として、われわれの父として自己啓示した」ところの**啓示者**・言葉の語り手である**父**の子としての啓示）を起源とする「神の言葉の三形態」（換言すれば、キリスト教に固有な類と歴史性）の関係と構造（秩序性）のことなのである。**それ以外のことはあり得ない。**このような、ブッシュの**自然神学か＜非＞自然神学かという分岐に関わる根本的包括的な原理的な事柄についての誤解・誤謬・曲解**は、バルトが一つ一つレンガを積み上げるようにして教会の宣教における一つの補助的機能としての神学を最善最良の仕方で構成したその成果を台無しにしてしまうことになるだけでなく、人々にバルトを誤解させ・誤謬させ・曲解させてしまうことになるし、バルトに迷惑をかけることになるのである。この時、われわれは、ブッシュがバルト寄りの中立主義者であったということを、換言すれば神学における思想家ではなかったということを知るのである、またブッシュは、ひょっとすると大っぴらにではなく**密かに**われわれを近代主義的神学の方へと、近代主義的プロテスタント主義的キリスト教の方へと、「神人協力説」へと向かうベクトルを持っている人間の感覚と知識を内容とする経験的普遍の尊重と「人間学の後追い知識」を目指す自然神学あるいは自然的な信仰・神学・教会の宣教の方へと導いていこうとしている記述家かもしれないとわれわれに思わせてしまうのである。総括的に言えば、ブッシュは、神学における思想家として『カール・バルトの生涯』を書いていないのである。いずれにしても、表出と表現、創造と享受の関係において、いったん表現された作品は、一方においてであるが、人々を誤解させ・誤謬させ・曲解させるという仕方で百人百様の享受の対象となるという宿命を持っているということを、ブッシュは肝に銘じて『カール・バルトの生涯』を書くべきであった。言い換えれば、バルト自身は、徹頭徹尾、キリストにあっての啓示、啓示の真理、啓示神学、「恵ミノ類比」（啓示の類比・信仰の類比・関係の類比）、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、そのイエス・キリストにおける神の自己「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の総体的構造という**バルト自身の＜立場＞**を堅持し・また堅持し続けたということを念頭に置いて自覚的に書くべきであった。バルト寄りで書かれてはいても、**自然神学か＜非＞自然神学かという分岐に関わる根本的包括的な原理的な事柄についても誤解させ誤謬させ曲解させてしまう**ような曖昧な書き方をしている中立主義者・**ブッシュの＜立場＞**においては、客観的な正当性と妥当性とをもって、自然神学の段階におけるあるいは自然的な信仰・神学・教会の宣教の段階におけるキリスト教を、根本的包括的に原理的に批判したフォイエルバッハやマルクスやハイデッガーによるキリスト教批判を、根本的包括的に原

理的に止揚し克服することはできないのである。

詳論は下記で展開：
https://think-imagine-judge.blog.jp/
あるいは
https://christianity-church-barth.info/
このPDF版は、上記のホームページやブログにある＜再推敲＞・＜再整理＞した論稿を、さらに＜再推敲＞・＜再整理＞して作成した論稿である。